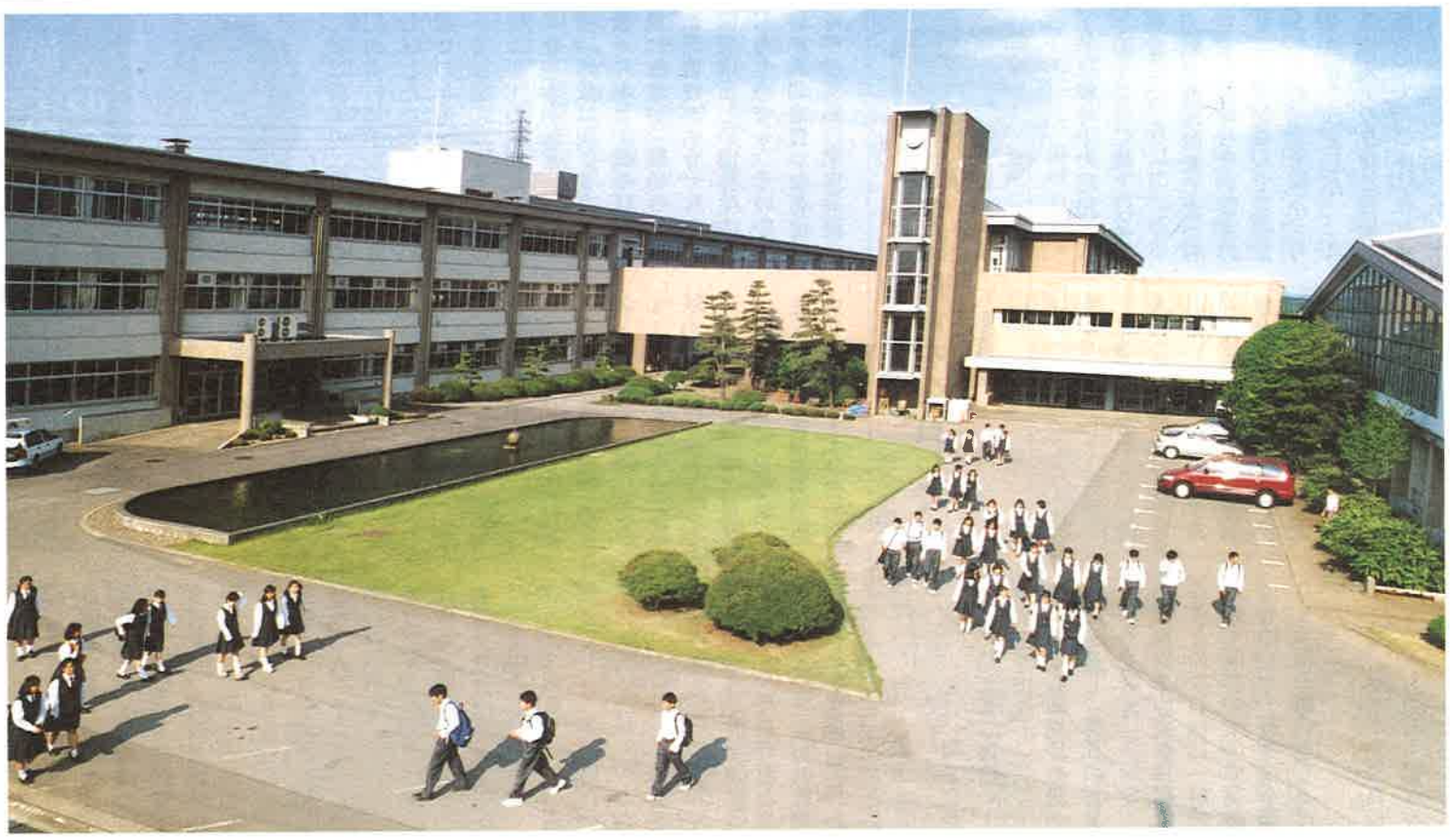


同窓会報
北陵
会報　第21号
●発行所●
栃木県立真岡北陵高等学校同窓会
●編　集●
同上編集委員会
●印刷所●
こだま印刷

母校の繁栄のために

同窓会会長　**菊地恒三郎**

会員の皆様には、同窓会の諸活動に種々ご協力をいただき、厚くお礼申し上げます。

明治四十一年四月に芳賀郡立農学校として創立されて以来、幾多の沿革を経て、平成七年四月には総合選択制専門高校に生まれかわりましたが、九十年の歴史を有する伝統校にふさわしい発展を続けております。

真岡農業高等学校の最後の入学生が三月には卒業式を迎えますが、有能な農業従事者を養成する学校としての使命は継承されつつも、時代の要請に応えて、情報処理や福祉関係などに携わる人材を育成することになりましたが、今日まで同窓生の多くが、農業の振興や農業経済の推進、地域産業の発展に活躍しておりますことは、誠に心強いものがあります。

真岡北陵高校に学ぶ生徒諸君は、建学の精神を受け継ぐ農業経営科をはじめ、商業系のビジネス会計科、コンピュータの知識を学ぶ情報処理科、高齢社会に対応した教養福祉科において、勉学やスポーツに励んでおり、卒業後産業界の各分野や福祉関係の新しい職場などで、母校の名声をさらに高めていただくとともに、同窓会の活動にも寄与していただきたいと思います。

本年十月には母校の創立九十周年の式典が開催されますが、同窓会といたしましても慶賀のいたりでありますので、できる限りの協力をしてまいりたいと考えております。

母校の繁栄と同窓会の発展のため会員の皆様の温かいご支援、ご協力をお願い申し上げます。

地域に開かれた学校をめざして

学校長　**安野弥一郎**

同窓会の皆様には常日頃の母校に対するご支援、ご協力に対して心から感謝申し上げます。

本校も本年は学科改変二年目を迎え、商業、福祉棟の建設、そして農場施設の整備等も終了し新しい施設での授業も軌道に乗ることができました。

県内で最も充実した施設そして新しい時代に向けての教育内容ということで県内外から多くの来訪者があり、その対応に追われる一年でありました。

学ぶ側も意欲的で落ちつきのある生徒が多くなり、本校の校訓「今日あるを感謝し最善をつくす」を実感させながら、教職員一体となってその指導にとりくんでいるところでございます。

今、高校の教育は非行や中途退学者の増加など、学校だけでは解決の難しい多くの課題を抱えています。そのためにも学校と家庭、そして地域社会のより一層の連帯、協力の必要性がさけばれており、昨年答申された中教審の大きな柱でもあります。本校も地域社会の方々やご父兄の協力を得て地域に開かれ共に学ぶ学校をめざしていろいろな取組みをしてまいりました。

県が進めているアカデミヤとちぎでの学校開放講座、地元下篭谷地区のみなさんとのフラワーロードづくり、真岡市内の保育園や幼稚園児への農場の開放そして公共施設へのフラワーポットの提供など積極的に進めております。ＰＴＡの方々には父兄が気軽に学校に足を運んでいただき生徒と共に学ぶことによりその姿勢が生徒への大きな刺激になればと願っております。

本年度は第二回目のオーストラリアへの海外研修を実施することが出来ました。十四名の生徒と二名の引率教師で福祉班、農業班に別れ、それぞれの研修を無事終了し元気に帰国いたしました。

同窓会から多大のご援助をいただいたことに対し心からお礼を申し上げます。

さていよいよ本年は本校が創立九十年という大きな節目の年を迎えることになります。

昨年より同窓会長さんを委員長にその準備にあたってまいりました。本校一万四千有余の同窓会の意気を示す絶好の機会でもあります。一層のご協力をお願い致しまして挨拶といたします。

青年部長として

平成二年度卒
真岡支部　**桜井一郎**

本校の同窓会青年部を引き受けて二年が過ぎ去ろうとしていますが、この二年間足早に過ぎ去ったように感じます。

八十七年にわたり、優秀な農業後継者の育成教育を努めてきた真岡農業高校も、「真岡北陵高校」と命名されて二度目の春を迎えようとしております。専門高校にふさわしく新風の舞い上がる様を目に誇りに思います。高校を巣立つ諸君のすばらしい夢を実現できるように祈願しております。

わたしにとって高校とは、自分のやりたいことを見つけられる所であったと思います。

恩師の先生方を始め、諸先輩によって築き上げられた校風や伝統と真岡北陵高校の新しい伝統を引き継ぎ頑張ってください。

本校を基礎とした生徒諸君のより一層の活躍を期待しております。今年は、わたしなりに同窓会青年部として努力して来たように思いますが、まだまだやり残したことばかりなので、これからも本校と本校同窓会のために協力し努力したいと考えています。

創立九十周年　10月に記念式典

同窓生の皆様には、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

本校は明治四十一年、芳賀郡立農学校として創設されて以来、平成九年をもって創立九十周年を迎えることになりました。この間、県立への移管、熊倉町より現校舎への移転、学科の改編など幾多の変遷を経て、平成七年四月には、校名を栃木県立真岡北陵高等学校に改称し、生物生産科・農業機械科・食品科学科・ビジネス会計科・情報処理科・教養福祉科の六学科を擁する総合選択制専門高校として生まれ変わり、堅実な歩みを続けているところです。

これも偏に同窓会各位の御理解と御協力によるものと深く感謝しております。

この度、創立九十周年の節目を迎えるに当たり、九十周年記念実行委員会を組織（同窓会・ＰＴＡ・学校）し、検討の結果次の記念事業を行うことになりました。

（一）九十周年記念式典・記念講演会
（二）同窓会員各簿の発行
（三）記念庭園の造成
（四）九十周年記念式典の発行
（五）学校案内ビデオの作成

この記念事業成功のため、同窓会員皆様の絶大なご支援をお願い致します。

なお、本事業の趣意に御賛同のうえ、一口五千円（一口以上）の募金に御協力を賜りますようお願い申し上げます。

叙勲おめでとうございます

叙勲までの私の歩み

昭和十七年度卒業
堀口　清

私は農家の二男として旧山前村島学校に入学致しました。定員五〇名の最後の年度です。在学中一番記憶に残っているのは三年生の後期六ケ月間の報徳寮の寮生活です。当時母校は現工業高校の敷地にあり、農場は現母校の敷地で、農場の一部に報徳寮があり、六ケ月間規則正しい団体生活をしたものです。その中で特に人間性豊かな報徳の精神と友愛の家族主義の精神教育を教えられたことです。今日の私の人生感の基礎をつくってくれたものと思います。一部屋に八名グループで兄弟の様な生活をしました。その中には議員を同時期活動した金敷・萱谷・現市長の菊地さん等同じグループでした。今日でもその仲間は兄弟のような友情で結ばれております。

私は農家の二男でありましたので卒業後教員を志し、昭和十七年栃木青年師範に入学し、戦時中でしたので昭和十九年九月繰上卒業し、三ケ月間久下田町青年学校に奉職し、その後十ケ月程軍隊生活をし、終戦と同時に復員しました。兄が戦死しましたので親の農業を引継き、社会人として第一歩の人生をスタートしました。当時は水田一町五反、畑一町五反の耕作面積で、旧山前村として大農クラスでした。当時は米麦中心とした作付で収入は米換算で一五〇表程度でした。青春時代の私にとってはものたらず、村一番県一番の農業経営を夢みて芳賀郡でトップをきっての乳牛を導入して、酪農経営と米麦と野菜をとりいれた経営にきりかえました。お陰で米換算で三〇〇俵以上の現金収入となり、当時優良農家と皆さんから認められ、当時の母校の三年生が視察に来たほどでした。お陰で昭和二十七年に知事表彰を受けました。昭和四十三年、地元からの要望にこたえ真岡市議に初当選し、四期十六年真岡市議とし市政に参加させて頂きました。

真岡には工業団地が造成され社会情勢は急速に変化しました。私の家庭でも農業に不安を感じ、後継者に教員を養子に迎え、ガソリンスダンド等副業経営を始め、農業は手間のかからない陸田化し、米だけとしました。四十才後半から商工業と市政参加による地域発展に情勢をささげました。平成四年商工発展功労として知事表彰を受け、平成七年秋の叙勲となりました。叙勲の理由は、青春時代の農業そして市政に参加し活動出来たのも真農友人のお陰です。真農精神は不滅です。

藍綬褒章を受賞して

昭和十八年度卒
上野　功

私は戦時中の昭和十八年の十二月に繰上げ卒業しました。

私の家は商家です。右も左もわからない農業の世界に飛びこんで苦労しましたが、三年間みっちり教育されました。二宮尊徳先生の教訓と教練で鍛えた丈夫な体は今も私の財産であり宝です。今も私は自営業を現役で頑張って居ります。

学校で習った農業のことは、みんなお返ししてしまったが今でも自慢し、誇りに思うことは、多くの親友が出来たことです。

卒業後自分の人生に、多大なる影響を与えてくれたからです。

友達は、一人でも多い方がよい、友達も私にとって財産であり、宝です。

さて私事、はからずも平成八年春の褒章に際しまして、藍綬褒章の栄に浴し、身にあまる光栄と感激致して居ります。この立派な賞を頂くことが出来たのも、これひとえに先輩各位の温かき御指導と、御支援の賜と心より感謝し、厚く御礼申し上げます。

又その節は、同窓会長はじめ諸先輩ご臨席の上祝賀会を開催して頂き、身にあまる御祝辞や記念品を頂載し、御礼の言葉もありません。

今後はこの栄誉に恥じることのない様に一層精進致す所存ですので従前にも増して、御苦情を賜ります様お願い申し上げます。

さて、校名が北陵高校に変っても教育方針と歴史と伝統は変わらないものと思いますので、勉強や実習やクラブ活動を一生懸命やることは勿論ですが、三年間に一人でも多く親友をつくって下さい。卒業後の自分の人生にプラスになることでしょう。

同窓会報を拝見して、校長先生の「新たな伝統」の構築に目を向けると、学校経営に、生徒活動に、又は就職状況等ほんとうに立派で、頭のさがる思いです。

農作業と教練に明け暮れた自分達の学校生活と比較して、隔世の感を禁じ得ません。まさに時代の違いを痛感致します。こんな立派な学校で、勉強や実習やクラブ活動が出来る生徒さん達が、うらやましく思います。

最後に、栃木県立真岡北陵高等学校の限りない繁栄と、同窓会の益々の発展を、ご祈念申し上げます。ありがとうございました。

農業士に就任して

地域農業の発展のために

昭和四十三年卒
服部正一郎

昨年、一月八日、県公館に於て、妻同席のうえ十五名の新農業士認定証を栃木県知事、渡辺知事さんの誕生日に、知事本人より授与いただき、大きな感動を覚えたことが、昨日のように鮮やかによみがえっています。

新農業士の研修会では農業士の役割、任務などを勉強し、その責務の重大さに改めて身を引きしめ、心新たにした次第です。さらに、地域においては、先輩農業士の方々と、各種講習会、研修会等に参加しまして、農業士としての自覚を再確認いたしました。また各種研修会、勉強会に於いて、高度な技術、知識など、得る所が多く、大変勉強になっています。出来る限り参加し研鑽に努めたいと思っています。

オレンジの輸入自由化から始まり、肉の輸入自由化、農業植物の輸入自由化、何と、米の部分輸入自由化により、今後ますます産地間競争が激化し、一方では、生産コストの低減化など山積みしています。しかし、こう言う時こそ、より経済性、合理性に立脚し、グローバルな視野のもと、情報を採取し、地域農業の発達、そして活性化に努力しなければなりません。

小生、微力ではありますが、地域を考え、農業後継者を育てて、これからの農業の未来を素晴らしいものとするため、努力していきたいと思いますので、なお一層の御指導をお願い致します。

優良農家紹介

私の農業

昭和四十七年度卒
山前支部　小倉孝一

私は、昭和四十七年度、真岡農業高校の農業科を卒業し、同時に就農しました。就農当時の我家の経営は、米と苺を中心としており、それは現在も変わっていません。その当時の苺栽培は、単棟無加温パイプハウスが主流でしたが、その後、加温連棟ハウスを建て、規模拡大をしてきました。加温方法は、オイルショックを境に、暖房機からウォーターカーテンへと切り替え、省エネルギーを、はかってきました。品種は、ダナーから麗紅峰ととちおとめを、栽培しています。品種の移行と共に育苗方法も変わり地床から、ポット育苗をへて、夜冷育苗施設を導入し、早期安定出荷ができるようになり、品質の向上に努力しています。現在は、苺三十三アール稲一三〇アールの経営をしています。

就農して二十数年を過ぎた今、思うことは、安心して、おいしく食べることができる、こめや苺を栽培したいということです。数年前から、化学肥料・農薬を使わずに、稲や苺の持っている生命力を充分に引き出してやることができないものかと、取り組んでいます。病害虫に弱く、連作障害も出やすい苺を、化学肥料や農業を使わずに、栽培することは難しいことですが、土壌改良（土壌の活性化）・健康な苗作りの実践によって、使用農薬・化学肥料を減らすことができ、それと同時に品質も向上していくと思われます。

将来的には、苺栽培の技術向上だけでなく、果樹・野菜・養豚・養鶏・酪農などの他分野の仲間との交流を持ち、共に、『農』の喜びを感じ、科学的な心と目を持った百姓を目指したいと思っています。そして、自然の恵み（太陽エネルギー・生命の源の水・浄化能力を持つ土）を充分に取り入れ、食べた人が健康になれる生産物を楽しく作っていきたいと思います。

優良農家紹介

わが家の農業経営

四十七年度卒
山前支部　白　滝　久　年

私は、四十七年度、卒業と同時に就農しました。

卒業当時の、わが家の経営は、パイプハウスの苺と水稲を主に、生産販売をしていました。栽培管現に労する時間が多く作物に手をかける時間は限られた。省力化と生産性を考えるようになった。

昭和五十一年に、私を含め七戸で、連棟ハウスによる春トマト栽培を始めました。面積は、二十五ａ収穫期間は、二月から六月の昼間の温度管理は、自動開閉、夜は暖房機を利用した管理により面積がこなせました。夏場の労力の活用にと平成元年より、パイプハウスを利用した抑制トマト栽培十八ａを始めた収穫期は十月から二月が目標。

ふたつの作型により年間収穫ができ、労働力の配分もうまくできたと思っています。

このごろの誌面には有機野菜とか、無農薬野菜とか又、ロックウールを利用した栽培とか、数年前から活字を多く見るようになりました。

どちらにすすめるか、思案中です。

どちらにしても消費者を考えにおいて経営を進めて行きたいと考えています。

それが私が考える楽農であり、安定した経営と思い、頑張っていきます。

私の思い

五十七年度卒
大内支部　石　塚　孝　男

昨年度は、優良農家という光栄な賞を頂き、誠にありがとうございました。現在、我が家におきましては、ネットメロンを中心に、ニラ、小稲といったような複合経営を営んでおります。近年、日本の農業を取り巻く状況は、大変きびしいものがあります。このきびしい状況は、実際には自分の経営には、すぐさま直面してはこないものの。ボクシングデでいうならば、ボディブローの様に徐々に、そして密接につきまとってくるのです。この問題を、いかに打波していったらよいのでしょうか。

私は、高校卒業後、現在の栃農大に進学し、二十才の時から、現在まで農業という職業にたずさわってまいりました。

卒業前の進路決定時期に初めは、絶対に就職しようと思い、両親には就職したいと話したのですが、いい返事が返ってこなく二ケ月近く悩み、考えた次第、短大に進学し農業という職業にたずさわろうと思ったのです。

そして就農し、はや、十三年がたとうとしています。この十三年間の間私は、農協だけに農作物の出荷をしてきた訳ですが、これからは、農協以外にも、自分で流通経路を見つけていかなくてはいけないと思っています。やはり、自分で大切に苦労して育ててきたものには、愛着もあり、まして、生活していく上においては、自分で、自分の育てたものに値をつけ消費者の方々にも、栽培者の顔が見える、そしてきびしい職業ではなく、楽しい職業だと自分で思える農業にしていくためにも、流通経路は自分自心で見つけにいく事が、前頭に述べました打波だと思います。それにはまず、現在の農業に対する考え方を変える必要があると思います。いろいろな面から農業というものをあらためて見つめ直す事が大切だと考えるのです。

まだまだ、大切な事は沢山ありますが、発想を変えるという観点を第一に、今後の地域農業、そして自分で納得のいく農業を目指し、農業という二文字にほこりをもって前進して行きたいと思います。

私の農業

昭和三十九年度卒
梅　田　孝　一

前回の同窓会々報に、私の友人であり、又、花つくりの先輩でもある大田正明さんの「花と一緒に三十年」という文章が載っておりました。その中に、「私の妻の希望がかなうとき、それが私の三十年のスプレーマムの美しさが、日本の家庭の中で咲き乱れる時」と書かれてありましたが、広い視野に立って花を愛し奥さんを思いやる心が溢れており、大変感動させられました。

私も「農業の曲り角」と言われはじめた時期に結婚しましたが、それ以来、妻と共に自分の人生を賭けた農業に懸命に取り組み、早や二十七年、月日の流れの早さを実感しております。

現在は、温室千二百坪とパイプハウス十アールの規模で輸菊栽培に汗を流しております。

水稲をふくめた複合経営から輸菊生産専業経営に転換したのは、ちょうど平成元年のことでした。水稲を土台に、安定した複合経営に比べますと、専業の危険性を感じないわけではありませんが、この作物以外に収入の道はないと思いますと、より一の真剣味を増してきますし、細かいところにも十分目が届くようになりました。この八年間に、農機具の償却費をはじめ生産経費の面で、随分合理化が図られて来たように思いますし、又、何よりもうれしい事は、生産作業のステージが決まり、作業の分業化やパートさんの導入ができやすくなり、時間にだいぶ余裕ができたことです。

二十代、三十代にはあまり感じませんでしたが「年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず」で、四十代後半になってみると、今更の如く時間のありがたさを痛感させられます。

農業情勢は、今後なお難しさを増すことが予測されますが、妻と苦楽を共にしつつ、悔いのない経営の成果を、立派に花開かせたいと思っております。

今を生きる

昭和四十七年度卒
永　島　昇　一

「将来は農業士」と夢をふくらませ就農し、早二十四年の齢月が過ぎ去った。

しかし現在の農業情勢現実の農業経営は大変厳しい問題「高齢化、人手不足、後継者不足、農薬公害」等々があります。そんな中、平成八年に優良農家として表彰され光栄に思っています。

就農当事をふりかえって見ました。

水稲百五十アールを中心に苺二十アール、メロン四十アールと夏期にはカンピョウ五十アール、ナス四十アールと複合経営を行っていました。両親と三人の労働力ではかなり厳しい状態でした。

そんな中地域で苺栽培が普及され始めた時期でもあったので稲作と苺栽培に力を入れることになった。当所はダナー（山よせ、株冷）麗紅と品種を変え女峰にと落ち着いた。規模拡大のために資金を貸り大型ハウスを建て、ウォーターカーテンを導入することにより温度管理がらくになり、冷蔵庫を購入することにより時間的に余裕が出来、地味ではあるが労働力、作業時間に負担がかからない様な経営を行って来ました。さらに作付け面積をふやそうとした矢先にまさかの深刻な事態が差しかかって来ました。高齢化及び、人手不足の波のあおりを受けることになってしまったのです。苺栽培の未練をのこしたまま現在稲作のみの兼業農家となり、将来息子が後継者となり、ふたたび農業経営に誇りが持てる日が来ることを願いつつ、今を生きる。

私の農業観

昭和三十七年度卒
土　井　欽　次　郎

私の様な微力なものが優良農家受賞をいただき心より厚く御礼申し上げます。きびしい農業情勢でありますが、私の経営内容考をのべます。

土地改良役員営農集団を設立当時より引きうけている関係上、米の生産調整は再生産を可能にする最低の米価を維持するため受け入れている。生産調整を実施しなければ米の過剰は一気に進み価格は低下する。又栽培意欲をなくし食料の安定供給が危うくなる転作関係などは農家各自が合意を再認識することと水田の持つ多目的な機能を有効利用することを実施している。今年度より遺伝子組み換え農産物が上陸することは皆さんすでに承知のことと思います。予定されているダイズ・ナタネは除草剤をかけても枯れない。ジャガイモ・トウモロコシについては植物体内で殺虫性のたんぱく質を作りだすという。国の食料自給率の低さを嘆くより自給率を高め、自給品目をふやし地域密着型とし、現在の飽食時代のなか、安全なものを自分自身の健康を保つためにも、又輸入農産物に負けないような百姓になり、日本を守りたい。

経営内容は水田六〇〇ａ・麦作五〇〇ａ・受託作業二五〇〇ａ・大豆五〇〇ａに付いては低農薬契約栽培を実施しています。

金敷芳雄氏御逝去

同窓会副会長
元ＰＴＡ会長

本校教育の発展に多大な功積を遺された同窓会副会長・元ＰＴＡ会長の金敷芳雄氏が十二月三十一日（火）逝去されました。

金敷芳雄氏は、昭和四十一年から四十三年にＰＴＡ会長に就任。この間真岡工業高校の独立、創立六十周年記念事業、現在地への新校舎移転等に尽力されました。教育への情熱と行動力により、終始一貫本校教育の充実発展に精魂を傾けられ、今日の礎を築かれました。

また、長い間同窓会副会長として、温かい人格と卓越した識見をもって諸課題に積極的に取り組まれました。平成七年度の学科再編にともなう教育施設の整備充実および真岡北陵高等学校への校名改称等本校教育に寄与された功積は、本校関係者はもとより、広く本県教育関係者からも認められております。

生前の偉大な足跡に対して心から感謝いたし、安らかな御冥福をお祈り申し上げます。

優良農家紹介

農業をめざして

昭和三十七年度卒業
物部支部　海老原　宏至

私は卒業後迷うことなく就農致しました。当時は米麦中心の経営でありました。食糧増産の時代であり、開田等が奨励され、当町に於いても米作り共進会等があり受賞され学んだ時期でした。

昭和三十三年頃当地域にイチゴが導入され、藁などを敷いた露地栽培が作付され、麦作との比較により高収入があり、赤いダイヤと称賛され、イチゴが注目視され始めました。

四十年代には農業用ビニールの開発により小トンネル栽培の作付がされ、その後には単棟ハウス、連棟ハウスと急激に生産量も増え、近代的な施設園芸栽培の技術が普及し、農協の青果物躍進大会、販売上位ベスト優良経営農家イチゴ栽培実績発評等を体験し、産地化形成が促進され所得倍増論による七桁農業から八桁農業へと、日本経済も高度成長期へと移行しました。

昭和五十七年、イチゴ栽培から花卉園芸シクラメン栽培へと切り替え、花作りの苦労、奥の深さを体験しています。

ハウス一面にシクラメンが開花した時の感動は、農業をめざした者だけが味わうことの出来る喜びであると思います。今日に於ては、ウルグアイラウンド合意など農産物輸入総自由化、国際化の荒波、自給率の低下、農家の高齢化、後継者不足など激変に対応できる新農基法の制定がなされる様ですが、農業をめざした者として、道筋を定めて邁進して行きたいと思います。

バラ作り

昭和四十三年度卒
田野支部　仁平　寛

この度、優良農家表彰という話がありまして、強く辞退する事も出来ず受けさせていただきましたが、私の住む地域には優秀な卒業生が多いなか、恐縮しております。

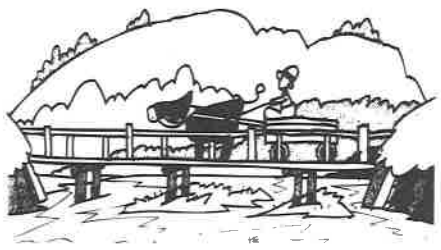
私は現在バラ専作経営をしていますが、昭和四十三年卒業後まもなく、ほとんど知識のないままバラをいじりはじめ二十七年もたってしまいました。その間仕事で知り合った仲間や、たくさんの人にお世話になり現在に至っています。

この仕事を続けるには常にあたらしいことを追い続けなければならないと思い、情報や機会があればめんどうがらず、国内外を出歩いています。今幸いなことに自分で開発工夫した栽培法、売り方、品種などで順調な経営をしています。最近県内では私と同年代の人が脱サラでバラ作りを始める人が多数いて、何かと相談されることが多くなりました。私がこの仕事を続けられたのは時流に乗れたからだと思っていますが、これからは大変だと思います。今花の業界は産地、市場とも大型化していますが私は今後雇用労力に頼らなくて済むぐらいに規模を縮小し、たのしく、ゆとりあるバラ作りをしたいなどと考えています、アイデアと隙間をねらった生産で生き残って行ければと思っています。

わが家の農業経営と課題

昭和四十七年度卒
七井支部　加藤　栄一

私が就農した頃の我が家の経営は、たばこ作を中心に、水稲、落花生、肥育牛、養鶏としいたけ栽培を加えた複合経営でした。徐々に養鶏と、落花生をやめ、その労力をたばこ作の増反に向けてきました。昭和六十三年にミシン葉編機の導入ならび、乾燥施設等の大幅な改善を行ったことにより、品質の向上、面積の増反につながり、平成二年から一千万円以上の収納代金を確保できるようになりました。労働面においても、簡易選別や、コンピュータ制御の乾燥機などのおかげで、いわゆる「夜なべ」仕事ということがなくなりました。又、平成四年から受委託共同乾燥施設の建設等もなされ、二八〇アールまで増反してきました。年々、耕作者の老齢化、人員の減少の中で、耕作組合の青年部、又同年代の仲間で組織している61会のメンバーと共に情報交換や勉強会、家族ぐるみでの余暇活動、ゴルフ大会や、輪投げ大会など、地域ぐるみでの産地維持、発展を見ざしています。面積の増反に共ない、連作障害による病害が、問題になっています。借地や畑の交換で、輪作体型をとっていますが、連作となる畑は、クロールピクリン、バスアミドなどの消毒にたよってしまいます。でもこれは、抜本的な解決にはならず、公害問題や、農薬代金の増額という悪循環にしか転がりません。私は、三年前からこの問題を何とか解決するために、消毒のいらない土づくりを目標に、良質堆肥の確保を目的に、堆肥盤と種々機械を設備して、落葉を中心に稲ワラ、籾がら、大豆から等々の収集につとめ、これを基に病害のない土づくりを目ざしてゆきたいと考えています。今までは、父母と共に協力し合っての労働でしたが、これから夫婦二人でも、所得を伸ばしていけるような作業体系、特に収穫作業における労働時間の短縮又、基盤整備による機械利用の高率化を考えてゆかなければなりません。今日、日本の農業をとりまく情勢は、大変厳しいものがあると思いますが、地域の仲間と共に、喜びあい、励ましあって農業で生き残っていきたいと思っています。



挨拶と報告

PTA会長　稲葉　健治

同窓会の皆様には、益々御健勝のこととお喜び申し上げます。又PTA活動に対しましては、日頃より御指導、御支援、御鞭撻を賜り紙面をお借りして、深く感謝いたすと共に、厚く御礼申し上げます。

平成七年度より総合選択制高校として新しくスタートを切った分けですが、PTAとしましても、新しい校名、学校内編成の中で、組織の改革を致しました。長い間、真農高母の会という事で、PTAの事業に大変御協力を頂いた母の会を、研修委員会に名前を変え、今までの母の会の行事、事業を引き継ぐ新しい名称に変更しました。

行事、事業については、本校の設備なり、講師の先生方の御指導を頂きながら、パソコン・福祉講座・野菜・又正月用寄植など盛況の内に終る事ができました。

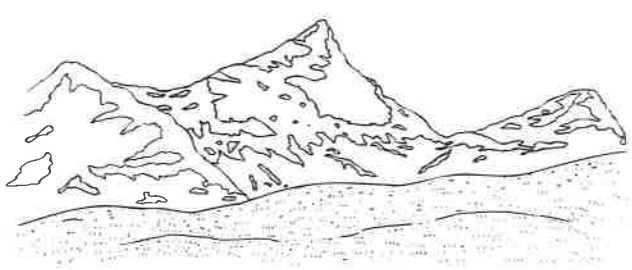
又、今まで機関紙の発行に対しては、先生方におまかせしていましたが、本年から新しい広報委員会として発足をし、年二回の発刊に協力を頂いている所です。また今年は三年ぶりの学校祭が開催された所ですが、PTAとしましてもバザー、農産物販売に協力を致しました。

又、校内マラソン大会に、役員・先生方又農場の先生方の協力を頂き、長年の夢であった活動ですが豚汁のサービスが行えました。大変好評であったという事で、関係者の皆様に感謝を致している所です。

本校も、栃高P連・関P連・芳高P連・全栃P連・農高P連など対外関係についても、役員各位の協力を頂いて参加を致し、見聞を広めてきました。

来年度は、本校創立九十周年。PTAと致しましても、同窓会の皆さんと一緒にお祝いをしたいと思っておりますので、よろしく御指導いただければ幸いです。

最後に今後共、PTA活動に同窓会皆様方の御指導・御鞭撻をよろしくお願い申し上げますと共に、北陵高同窓会の益々のご発展とご活躍をお祈り致しまして挨拶とさせて頂きます。



設楽浩君　筑波大学にみごと合格

進路指導部長　稲葉　光國

今年度から実施された筑波大学生物資源学類の専門高校別枠特別推薦（定員十名）に応募した設楽浩君（農業機械科）が受験者一二〇名という難関を突破し、合格致しました。本校では始めての快挙です。パラグアイから高度な学問や技術を身につけ故国の役にたちたいという気持ちで来日して4年目、日本語は本校生のトップレベルにまで上達し、国際教育弁論全国大会で優秀賞に入賞するなどの活躍が認められた結果でした。また、「日本人の食生活の変化と農業生産の方向について」、「新食糧法で認められている消費者・流通業者・生産者の自立について」論じなさいという小論文。「国際社会のなかの日本の在り方、女性の社会進出、労働における男女差別」というテーマに関するディスカッションに自己の意見を述べられたことなど普段から今日的な課題に興味・関心をもち「知らざるを知る」旺盛な知識欲をもっていたことが合格の決め手でした。また、今年度の進路は各学科の特性を活かした進学が目立ちました。農業経営科は東京農業大学、立正大学農学部、農業機械科の高山短大自動車工学科、食品科学科の武蔵丘短期大学健康栄養科、生活科学科の作新女子短大幼児教育科への合格など、各学科で学習した専門知識をさらに磨きあげる意欲をもった生徒が合格したことは後輩への良き励ましとなることと思います。その他国学院短大にも合格し、私大3名、短大四名と過去最高の進学者になりました。専門学校の分野でも栃木県農業大学校、日産自動車整備専門学校、日建工科専門学校、栃木介護福祉専門学校、宇都宮ビジネス電子専門、マロニエ医療福祉専門学校など明確な資格取得を目的に進学した生徒が多かったことも良い傾向でした。

活動報告

生徒会の一年

生徒会顧問　白滝知大

平成八年も昨年同様大きな変化のあった一年だったように思われます。と言えば、三年ぶりに公開となった学校祭があげられます。学校祭実行委員会が生徒会役員を中心に組織され、テーマの設定・ポスターの選定・全体計画などが実行委員会の手によってなされました。我々職員も不慣れな面があり、十分な準備期間がとれなかったにも関わらず、会長（実行委員長）の浅香君、副会長の石崎君、藤井さんをはじめ役員全員が一丸となって学校祭の実行のために懸命に努力してくれました。おかげさまで、次のような内容を実現することができました。

学校祭テーマの垂れ幕（十ｍ×二本）・会場案内板（電光表示付）・サービスステーション（綿菓子無料配布・子供達へのプレゼント他）・メッセージ風船。改善すべき点や不手際が目立った点などもありますが、初めての試みにしては、そこそこの結果が得られました。

その他の、行事について振り返ってみますと、益子養護学校との交流会は、今年はあいにくの雨に見舞われ、農場から格技場に場所を移して実施しましたが、災い転じて福となるの諺そのままに養護学校の生徒さん達と本校の生徒が本当に一緒になっていろいろなゲームで楽しむことができた交流会になりました（とりわけ人間輪投げとペットボトルロケットが好評でした）。

また、来年が本校創立九十周年であるということを考慮して、役員研修会の中に「北陵高校の歩み」と題して先輩の高校時代の体験を話していただく時間を設けました。講師の井野博先生の楽しい講話のおかげで先輩方を身近に感じられる貴重な体験ができました。今年の選挙では生徒会長にビジネス会計科の佐藤君が選出され、役員の構成も約半数が新しい学科の生徒がしめるようになるなど、私達生徒会の本当の意味での変化というものはこれから訪れるのかもしれません。しかし、同窓会の皆様の暖かいご声援があればどんな大きな試練も乗り越えていけることでしょう。未熟な私達に今後ともこれまで以上のご指導ご鞭撻をお願いいたします。

平成8年度農業クラブ活動の紹介

農ク顧問　横山孝司

平成八年度の農業クラブ活動は、三月二十五日（日）二十六日（月）の一泊二日に渡って行われた農業クラブ役員の研修会より幕を開けました。今年の研修会は、役員の親陸を深め円滑な行動の進行と農業クラブ活動の活性化を計ることを目標に行いました。

四月二十日（土）には本校体育館において一年生の一・二・三組の生徒を対象に農業クラブの発表や競技を実際に見てもらって理解を深めてもらおうという意図のもと、資料の配布以外に、前年県大会・関東大会に参加したクラブ員の協力を得て意見発表、プロジェクト発表を行いました。また、鑑定競技会、測量競技会、についても役員が演じたり、質問したりと工夫をしながら説明を行い、一年生も真剣な眼差しで発表を見、聞いていたようでした。

五月八日（水）に本校体育館において本校農業クラブ員全員を対象に農業クラブ総会を行いました。役員は、総会に当たり会の進め方や総会資料作りに大変な労力をつぎ込んでいました。とくに、本校は昨年に引き続き栃木県学校農業クラブ連盟の事務局校であったので、本校の総会前に県連盟の役員会や研修会の準備もあり、役員は大変苦労したのではないかと思います。しかし、役員の努力のかいあって、県連盟・本校の総会とも無事終えることができました。

五月十八日（土）に、クラブ員の身近な問題や将来の問題について意見を交換し、問題解決のために意見発表会を行っています。今年の校内大会では、A部門で三―一の浅香孝行さん、B部門で三―五の磯野幸花さん、C部門で一―三の関岡住恵さんが最優秀賞となりました。浅香さんは、農業後継者として我家の農業をどのように担って行くべきか、ニラ栽培農業の明日をどうすべきか模索する姿がとてもよく表現されていました。磯野さんは、中学、高校のボランティア活動を通し老人と触れ合うことで、いったい自分は何が出来るのか、どのようなことをしてあげられるのかを真剣に考える姿に共感を覚えました。関岡さんは、兼業農家のお父さん・お母さんの作業を手伝うことやおじいさんの農業への想いと生き様から生き甲斐をかけた仕事を自分の中に醸成していく過程が大変よかったと思います。三人とも県大会では、惜しくも二位となり関東大会には、参加できませんでしたが、意見発表の原稿を書いたり、発表したり、その活動の中で自分を発見したり、自分の進路を考えたり、毎日の練習の中でプラスとなったことが数多くあったと思います。

六月十九日（水）に校内鑑定競技会を行いました。鑑定競技会を行うに当たって、クラブ員の積極的な参加を促すために、四月中旬から鑑定競技会まで、東・西昇降口に農業鑑定競技実施基準の中から選んで、実物を各コースから五点ほど一週間に二回程度新しい物に交換しながら展示を行いました。今年の全国大会鑑定競技会は、二年一組の海賀智恵子さんと三年四組の高山敬広さんの二人が入賞しました。

七月九日（火）に小山北桜高校で行われた平板測量競技会県大会において三―三石崎正稔さん、三―三高橋渡さん、二―三須田繁治さんのチームが最優秀賞を獲得し、全国大会出場の権利を手にしました。

一月二十三日（木）に平成八年度の校内プロジェクト発表会が行われ、本年度は、十一チームが参加しました。課題研究の結果発表の中には各科の特徴が生かされ実践的なものから、ユニークなものまで幅広く、生き生きとした発表が大半を占めました。また、ホーム・スクールプロジェクト的な調査研究を行い大変よくまとめられた発表もありました。審査の結果、二―一組田村優子さん他八名の「栃木の特産品イチゴを受け継いだ専業農家を目指して・女性や高齢者によるイチゴ栽培」が最優秀賞に輝きまして。最優秀賞には、市川栄一さん他十一名、関口住恵さん他十一名、松野智さん他四名が選ばれました。また、ここで本年度のプロジェクト発表県大会・関東大会の結果を報告したいと思います。県大会では本校がA部門で三―五の仁平みどりさん他十一名が、B部門では三―二の浅山隆彦さん他十名が、そしてC部門では三―五の関口美和さん他十名が各部門で最優秀賞という快挙を成し遂げ、関東大会に向けて幸先のよいスタートを切りました。しかし、山梨県で行われた関東大会ではA・B部門が惜しくも僅差で二位となり、全国大会への切符を逃してしまいました。本当に残念な結果となってしまいました。今回、校内プロジェクト発表会で入賞したチームの中から来年度の全国大会鳥取県大会に出場し、入賞の栄誉に輝くチームが出ることを期待したいと思います。

□家庭クラブ活動□

「全国大会を見学して」

家ク顧問　外舘規子

本年度は、家庭クラブ全国大会が岩手県盛岡市で開催されました。発表見学に参加した家庭クラブ会長の堀野美香さんの全国大会の活動報告を掲載します。

大会第一日目のホームプロジェクト発表では、七校の発表がありました。この中で文部大臣賞に選ばれたのは岩手県立一関第二高等学校の小林幸恵さんの「姉と共に生きる～障害者の姉に笑顔を～」でした。障害者のお姉さんの介護を手伝い、家族の負担を軽減する、またお姉さんの生活の質の向上をはかり、笑顔で過ごしてもらうことを目的とした内容でした。

二日目の学校家庭クラブ活動発表では七校が日頃の研究と活動の成果を発表しました。文部大臣賞に輝いたのは福島県立原町高等学校発表の「ふれあい、ささえあい、助け合い～共に生きる心のふるさと作りを目指して」でした。介護エプロン製作、段差用スロープの製作、お年寄りの移動介助用補助ベルトの製作、クラブ員家庭へのふるさと体験ホームステイの温かさが伝わってくる素晴らしい発表でした。

大会見学に参加し、他校の家庭クラブ活動をたくさん知ることができました。本校もこれからは人の気持ちを考えての活動を目標に掲げ、頑張っていきたいと思います。

「平板測量競技会に参加して」

「県大会最優秀賞」

農業機械科三年　石崎正稔

私達、三年生二名・二年生三名は「平板測量競技大会」に向けて、五月から顧問の加藤先生や広瀬先生のご指導を受け日々練習してきました。

練習内容は、毎日二～三回平板測量を行ない、三辺法と三斜法と呼ばれる方法で計算し、面積の誤差を出すということをしました。ここまでは、去年と変わっていませんが、練習の最後に今日の反省点を全員で話し合うというところが変わっているところでした。その他、私達で「測量ノート」を作成して、一日一日の測量をこまめに記録したり、正メンバー（器械師・器械補助・Ｏ端の三名）の他の二人は、フィールドの外側から見てもらい、無駄な動きがあるかをチェックしてもらったりしました。

栃木大会一ケ月前には栃木大会の実施要項を再確認して、次の日から厳しい審査のもとで制限時間をオーバーしない等、あらゆる面を改善して万全の体勢で大会をむかえました。

しかし、大会当日は大ハプニングが起きました。それは、雨だったのです。これまでは、晴天を中心に練習してきて、雨天時は全くといっていいほど練習していなかったのです。本番前に先生から「気楽に行け、製図の様なものだから。」という言葉で気が楽になりました。それが功をそうしてか運良く優勝することができました。

それから、夏季休業を利用し自分達の個人の力を伸ばすことに全力を注ぎました。その他測点が五点から六点に増えたために、時間が予想以上にかかってしまい、改善するには大変でした。

全国大会当日は、見知らぬ土地で緊張してしまい、普段の実力が出せませんでした。入優もできず残念でした。

これまで努力したことは、これからの人生で何らかの励みになると、私は信じています。

私達三年生が成し遂げられなかった夢、「全国大会入賞又は優勝」の夢を、後輩に託したいと思います。

海外研修

オランダの空の下で

生活科学科三年　仁平みどり

高校生最後の夏休み、私は、酪農王国オランダでとても貴重な体験をして来ました。

私の家は、水稲中心の専業農家ですが、オランダではもちろん酪農家にステイすることになりました。酪農に対する知識はもとより、牛と関わることさえ、農業高校にいながらも無縁でした。一週間だけでしたが、早朝ミルキングの勉強と言うよりは体験学習を学校で行いました。しかし、そんな短期間の体験だっただけに役に立ちませんでした。オランダは、日本よりも小さな国だけれど、酪農王国であるだけに、そのスケールの大きさはそれに対処できる物を持っていました。私のステイした家は乳牛六十頭を飼っていました。朝・夕の二回ミルキングを行う。日本だったら早朝からミルキングを行うことは私も知っていました。だから、初めの日の朝五時を寝過ごしたと思い慌てて飛び起きました。けれど、まだ誰も起きていませんでした。その辺を散歩していると、主人のヤンさんは六時ぐらいに起きて来てミルキングを行うことになりました。

私が何よりも驚いたのは、広い放牧地に放された牛達がミルキングの時間になると、牛舎に帰って来ることです。いくらかの牛は、なかなか帰ろうとしないため、裏から追い立てます。ところが、主人のヤンさんの一声ですぐに帰ろうとする牛達は、私の声には知らぬ顔をするのです。それで、牛を裏から追い立てるのが、牛を追い掛けてしまいました。オランダだからこそできたのだと思いました。

そして何よりも奥さんとの関わりや、違うステイ先の人達との関わりが多かったのを思い出します。ホームシックにならないために、同じ団体のメンバーと会う機会をなんども与えてくれたこと。女性であるだけに、洗濯や食事の手伝い、花壇の手入れからペンキぬりまで、ホームキーパー的な仕事中心に、仕事をさせてくれたこと。また、子供達と楽しく遊んだこと。言葉と心の壁を乗り越えて、私は今思います。こんなチャンスに巡り会えたこと、貴重な体験ができたことに感謝したいと思う。研修した者しか分からない味わいが、オランダの空の下にはあった気がします。

オーストラリア研修に参加して

生物生産科二年　加藤雅行

私たちは、十二月二十五日から、一月八日までの十五日間、日本から約七千五百キロ南にある国オーストラリアに行って来ました。今回の研修は、農業と福祉、二つのコースに分かれ、それぞれの研修を行なったわけですが、私は、農業コースに参加しました。農業研修の研修地は、リートンという町でした。位置は、シドニーから西へ六百キロ内陸に入った所にある町です。交通手段は、バスでした。そのバスから見える景色がどこまで行っても変わらず、日本では、とても見ることのできない光景に、ただただ、言葉が出ませんでした。

「ホームステイ」。私は、その言葉を聞いた時、とまどいました。なぜなら、うまくコミュニケーションができるか？事前に英語を勉強した所で、どこまで通用するのか、はなはだ心配でした。いざホームステイしてみると、さほどでもなかったのです。単語を言えばなんとかではありますが、通じたのです。私は、はっきりいって英語に自信がありませんでした。しかし、私たちは、三人でウォルシュさんの家へお世話になっていたのですが、ウォルシュさんは、私たちの英語を聞きなおしながら理解してくれ、なんとか、コミュニケーションがとれました。ウォルシュさんの家族は子供が五人もいて、私たちは、子供の相手をしつつ、ウォルシュさんの農場の仕事をしました。ウォルシュさんの農場は二四三ｈａ、その広大な土地をトラクターで耕やしたり、羊を移動させたりしました。オーストラリアの機械は大きい。私たちは、日本のトラクターを写真で見せたら、「小さいなぁ」と言われました。あのような広大な土地で使う機械なのだから、大きいのにこしたことはないが、しかし大きかったです。私もトラクターに乗って作業をしたのですが、ハンドルがよくきくし、馬力がある、日本のトラクターもこれくらい馬力があればと思いました。大きいと言えば、家庭の中の物まで大きい、ジュースは三七五㎖だし、コーンフレークの箱は、日本の二まわりは大きかった。

どこの国の子供でも、無邪気でかわいいものだということは、解っていたのですが、ウォルシュさんの家の子供は、やんちゃでした。私たちは、子供たちの相手をしていたわけですが、子供と思ってあなどっていては失礼かもしれない。いろいろとその子供に、教えてもらったことがたくさんありました。例えば、日本の子供はあまり自然の中で遊ばなくなった。しかしオーストラリアの特に田舎の子供たちは、自然の中で遊びまくっていた。私も幼い頃はよく近所の林の中で遊んだものだ。その幼い時のことを思い出させてくれました。

この研修に参加できたのも、成功したのも、親、学校、先生のおかげです。私は、オーストラリア研修で学んだ知識を、今後我が家の経営にとり入れたり、地域、やがては国の農業を一段と活性化させていきたいと思っています。

オーストラリア研修に参加して

教養福祉科二年　横山陽子

リア研修に参加しました。「参加して良かったな。」と心の底からそう思えます。

研修の目的は主に福祉について学んでくることと、語学研修でしたが、私が一番期待していたのはそのどちらでもなくホームスティすることでした。期待どおり、私はとても良い家族（ホストファミリー）とめぐり会うことができました。そのホストファミリーは決してお金持ちではなく貧しくもない、平均的な生活水準の家でした。ボランティアで受け入れてくれただけでなく、私のためにいろいろな計画を立ててくれました。ピクニックにつれていってくれたり、ドライブやキャンプ場に行ったり、大きな川で泳いだりもしました。毎日が楽しく、充実した日々を送っているという実感がありました。そんな生活の中で、幸せを感じたのはほんとにささいなことでした。それは、私の片言の英語を懸命に聞いて、理解しようとしてくれたマムとの交流です。簡単な文章が伝えられなかった時の事です。辞書を示しながら懸命に訴える私と、マムの努力で理解し合えた時、抱きしめて喜んでくれました。今思えばあの時の喜びは理解し合えたことに感動したばかりでなく、マムの優しさや温かさに対しての感謝の喜びだったのです。

もう一つ感動したのは、老人ホームのことです。私達は、「イナラビリッジ」という施設でボランティアをさせてもらいました。初めて施設を見た時は驚きました。本校ぐらいの広大な敷地に、老人専用の家や老人ホームが集中して建てられていたからです。実際は、ナーシングホーム三つ・ホステル三つ・個人住宅三百戸ぐらいが建てられています。また、例えば、生活に必要な全ての施設がそろっています。見学した多くの施設の中で一番感動したのがホステルです。ホステルの建物の中は、中庭があって緑であふれていました。部屋はマンションのようになっていて個人によって部屋の中の雰囲気は全く違って見えました。さらに場所によって迷子にならないように壁や戸びらが色分けがしてあります。とても明るく日本の施設とは違っていました。

いろいろな人と出会いましたが、一番印象に残っている人はスコッティさんです。私はスコッティさんにハンドマッサージをさせていただきました。スコッティさんは強い痴呆を持っていて、さっきした事もすぐ忘れてしまうのに、会うたびに「ハンドマッサージありがとう」と、お礼を言ってくれたのです。

ホームスティでも施設でも、人は言葉が通じなくても心を通わせることのできることを学びました。そしてここで学んだことを、これからの人生に生かして生きたいと思います。

編集後記

本年の秋十月に、創立九十周年記念式典が予定されています。すでに記念事業実行委員会も構成がなされて、なかんづく同窓会も歴史的なその節目に、遺憾なくご協力を致す趣きであります。

私共編集委員一同この事柄に深く関心を寄せて参りたく、茲に委員各位を紹介列記いたして、創立九十周年を迎える喜びの気持ちをお伝え申し上げる次第であります。

編集委員長　井野　博
委　員　館　芳衛
広田茂十郎
青木　良雄
櫻井　一郎
岩倉　京子
服部　和子
猪野　正子